能性が示された。一方で、婚外出生児の 3 割は生後半年時点で父親と同居していることも事実であり、そうしたケースでは父親の育児参加は婚内出生児世帯とほとんど変わりなく、また比較的高収入の母親が多いなど、婚外出生児世帯の多様性も明らかになった。このように様々な状況にある婚外出生児であるが、こうした条件が、その後の成長にどのような影響を与えるのかについてはほとんど明らかになっていない。21 世紀出生児縦断調査は、すでに小学校入学時点まで追跡が進んでいるので、そうした検証に生かすことも可能であろう。その場合は、婚外出生児がその他の出生児とどう違うかだけでなく、そうした違いが、どのような条件によって緩和されるかについても明らかにすべきであろう。

なお、米国では、ひとり親世帯の貧困を解消する方向性として、父親の養育責任（時間的、経済的貢献）の強化が注目されている(McLanahan 1995)。日本においても、このような議論をするためには、別居している父親がどのように子どもに関わっているのか、どの程度の経済的支援をしているのか、といった実態が把握されなければならない。本縦断調査においても、別居の親に関する情報の収集が有効であると思われる。父親と子どもの関係は、父親が生物学的父親かどうかで異なってくる(Heiland and Liu 2006)。従って、調査設計上、生物学的親なのか、同居する親の新たなパートナーなのかを区別できる工夫が望まれるところである。世帯収入における「その他の収入」についても、公的扶助や親族からの援助等を個別に把握できるようにすることによって、子どもの養育責任のバランスに関する議論に役立てることが可能であると思われる。

文献

Akerlof, G.A., J.L. Yellen, and M.L. Katz. 1996. "An analysis of out-of-wedlock childbearing in the United States." *Quarterly Journal of Economics* 111(2):277-317.

Andersson, G. 2002. "Children's experience of family disruption and family formation: Evidence from 16 FFS countries." *Demographic Research* 7:343-363.

Billari, F.C. 2008. "Lowest-low fertility in Europe: Exploring the causes and finding some surprises." *The Japanese Journal of Population* 6(1):2-18.

Bumpass, L. and S. S. McLanahan. 1989. "Unmarried motherhood: Recent trends, composition, and black-white differences." *Demography* 26(2):279-286.

Burton, L.M. 1995. "Family structure and nonmarital fertility: Perspectives from Ethnographic research." Pp. 147-165 in *Report to Congress on Out-of-Wedlock Childbearing*. DHHS Pub.No. (PHS) 95-1257. Department of Health and Human Services.

Duncan, G., and S. Hoffman 1990. "Welfare benefits, economic opportunities, and out-of-wedlock births among black teenage girls." *Demography* 27(4):519–535.

Fuligni, A.L., L.McCabe, S. McLanahan, and J. Roth. 2003. "Four new national longitudinal surveys on children." Pp. 326-359 in *Early Childhood Development in the 21st Century*. J. Brooks-Gunn, A. Fuligni, and L. Berlin (eds.). New York: TC Press.

Heiland, F. and S.H. Liu. 2006. "Family structure and wellbeing of out-of-wedlock children: The significance of the biological parents' relationship." *Demographic Research* 15(4):61-104.

Hertog, Ekaterina. 2009. *Tough Choices: Bearing an Illegitimate Child in Japan*. Stanford, CA: Stanford

University Press

Hogan, D.P. and E.M. Kitagawa. 1985. "The impact of social status, family structure, and neighborhood on the fertility of black adolescents." *The American Journal of Sociology* 90(4):825-855.

Horvath-Rose, A. E., H. E. Peters, and J. J. Sabia. 2008. "Capping kids: The family cap and nonmarital childbearing." *Population Research and Policy Review* 27(2):119-138.

Kiernan, K. 2001. "The rise of cohabitation and childbearing outside marriage in western Europe." *International Journal of Law, Policy and the Family* 15(1):1-21.

Kiernan. 2004. "Unmarried cohabitation and parenthood: Here to stay? European Perspectives." Pp.66-95 in *The Future of the Family*, edited by D. P. Moynihan, T. M. Smeeding, and L. Rainwater. New York: Russell Sage Foundation.

Lichter, D. 1995. "The retreat from marriage and the rise in nonmarital fertility." Pp. 137-146 in *Report to Congress on Out-of-Wedlock Childbearing*. DHHS Pub.No. (PHS) 95-1257. Department of Health and Human Services.

Marshall, W. and I.V. Sawhill. 2004. "Progressive family policy in the 21st century." Pp.198-230 in *The Future of the Family*, edited by D. P. Moynihan, T. M. Smeeding, and L. Rainwater. New York: Russell Sage Foundation.

McLanahan, Sara. S. 1995. "The consequences of nonmarital childbearing for women, children, and society." Pp. 229-239 in *Report to Congress on Out-of-Wedlock Childbearing*. Department of Health and Human Services.

McLanahan, S., I. Garfinkel, N. Reichman, J. Teitler, M. Carlson, and C.N. Audigier. 2003. "The Fragile Families and Child Wellbeing Study Baseline National Report." Princeton, NJ: Bendheim-Thoman Center for Research on Child Wellbeing.

Moffitt, R.A. 1995. "The effect of the welfare system on nonmarital childbearing." Pp. 167-176 in *Report to Congress on Out-of-Wedlock Childbearing*. DHHS Pub.No. (PHS) 95-1257. Department of Health and Human Services.

Moffitt, R. A. (Ed.). 1998. *Welfare, the Family, and Reproductive Behavior: Research Perspectives*. Washington, DC: National Academy Press.

Moon, D.and J.C. Whitehead. 2006. "Marrying for America." Pp.24-45 in *Fragile Families and the Marriage Agenda*, L. Kowaleski-Jones and N.H.Wolfinger (eds.). New York: Springer.

Morgan, S. P. 1996. "Characteristic features of modern American fertility." *Population and Development Review*, 22:19-63.

Pagnini, D. L. and R. R. Rindfuss. 1993. "The divorce of marriage and childbearing: Changing attitudes and behavior in the United States." *Population and Development Review* 19(2):331-347.

Perelli-Harris, B., W. Sigle-Rushton, T. Lappegard, A. Jasilioniene, P. Di Giulio, R.Keizer, K. Koeppen, C. Berghammer, and M. Kreyenfeld. 2009. "Examining nonmarital childbearing in Europe: How does union context differ across countries?" *MPIDR Working Papers* 2009-021.

Randles, J. 2009. "Parenting in poverty and the politics of commitment: Promoting marriage for poor families through relationship education." *ISSC Fellows Working Paper*. UC Berkeley: Institute for the Study of Social Change.

Raymo, J. M., M. Iwasawa, and L. Bumpass. 2009. "Cohabitation and family formation in Japan." *Demography* 46(4): 785-803.

Raymo, J. M. and M. Iwasawa. 2008. "Bridal pregnancy and spouse pairing patterns in Japan." *Journal of Marriage and Family* 70(4):847-860.

South, S. J. and K. M. Lloyd. 1992. "Marriage markets and nonmarital fertility in the United States." *Demography* 29:247-224.

United Nations, Population Division. 2003. Partnership and Reproductive Behaviour in Low-fertility Countries, ST/ESA/SER.A/221.

Ventura, S. J. and C. A. Bachrach. 2000. "Nonmarital childbearing in the United States, 1940–99." *National Vital Statistics Reports* 48(16). Hyattsville, MD: National Center for Health Statistics.

Ventura, S. J. 2009. "Changing patterns of nonmarital childbearing in the United States." NCHS data brief, No.18. Hyattsville, MD: National Center for Health Statistics.

Vining Jr, D.R. 1983. "Illegitimacy and public policy." *Population and Development Review* 9(1):105-110.

Wilson, W. J. 1987. The Truly Disadvantaged: The Inner City, the Underclass, and Public Policy. Chicago IL: University of Chicago Press.

岩澤美帆.2007.「出生率の動向と仮定設定(2):初婚の動向と出生率への影響」Pp.101-124　金子隆一(編)厚生労働科学研究費補助金政策科学推進研究事業『将来人口推計の手法と仮定に関する総合的研究』平成 18 年度報告書.

厚生労働省大臣官房統計情報部.2008.『第６回２１世紀出生児縦断調査（平成 18 年度）』

国立社会保障・人口問題研究所.2009.『人口統計資料集(2009)』

婚差会. 2004.『非婚の親と婚外子：差別なき明日に向かって』東京:青木書店.

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）.2006.『平成 17 年度「少子化社会に関する国際意識調査」報告書』

山田昌弘.2004.「『妊娠先行型結婚』の周辺」Pp.181-193.『超少子化時代の家族意識:第１回人口・家族・世代に関する世論調査報告書』 毎日新聞社人口問題調査会（編），東京：毎日新聞社.

善積京子.1993.『婚外子の社会学』京都:世界思想社.

１１　若年出産と高齢出産：21 世紀出生児縦断調査第 1～6 回から

相馬 直子

はじめに

日本における若年出産（10 代の出産）の実態について、1997 年とピーク時 2002 年の 6 年間の出生数を母親の年齢階級別にみてみると、15～19 歳では 29%、16,598 人だった出生数が 21,349 人と急増している。2005 年には約 10 年前とほぼ同じ数の 16,531 人になり、数年やや減少傾向にあったものの、1990 年後半から 2000 年代前半の変化、そして、欧米諸国など国際的な動向からすれば、今後は 10 代の妊娠・出産について増加の可能性も含めた対策の検討が必要である。地方自治体の子育て支援の現場でも、若年出産に着目した支援の必要性が提起されている。国際的にも若年出産（teenage pregnancy）の問題は、重要な社会政策の課題となっている。本研究は、若年出産に着目し、社会経済状況や子育ての実態とその特徴を高齢出産との比較から把握することを目的とする。

１．先行研究の概要

（１）若年出産が社会経済的結果に与える影響

Berthoud and Robson(2001)は、EU13 カ国の若年出産の国際比較を、欧州連合世帯パネル（European Community Household Panel）を用いて行っている。この研究では、初産が 10 代と 20 代とで女性や家族にとっての結果を考察している。各国にバリエーションがあるものの、EU 全体（スウェーデンをのぞく）では、10 代で出産した女性の方が 20 代で出産した女性よりも暮らし向きが相対的に悪い。パートナーが同居していない率も少し高くなっている。もっとも顕著なのが就業状況にあらわれており、10 代で出産した女性の約 6 割が就業しておらず、また、女性もパートナーも就業していない率も、10 代で出産した女性の方が 3 倍となっている。さらに、学歴が中等教育以下の割合が 10 代で出産した女性の方が高く、10 代で出産した女性の貧困率は、20 代で出産した女性の貧困率の 2 倍となっている。(Berthoud and Robson 2001: 3-4)。特に貧困率については、不利を示すもっとも総合的な評価基準であるが、特にオランダはもっとも高く、81%の 10 代親が貧困世帯であり、EU の中でも顕著に高い(Berthoud and Robson 2001: 43-44)。

表１　5 つの結果：20 代で出産した女性と 10 代で出産した女性との比較（単位：%）

	15 歳～19 歳	20～29 歳	比率
学歴が中等教育以下	67	34	2.0
パートナーなし	23	19	1.2
就業していない	59	41	1.4
女性もパートナーも就業していない	26	8	3.3
貧困率	45	21	2.1

出典：Berthoud and Robson (2001: 4)

日本において10代親の社会経済的アウトカムに着目した実態調査は限られているが、東京都社会福祉協議会保育部会調査研究委員会(2002)があげられる。この調査では、10代の母親は子育ての家庭で半数の子どもの父親が不在であること、祖父母支援が大きいこと、就業している母親の大多数が不安定な就業状況にあることが指摘されている。

ヨーロッパ諸国では、若年出産が社会経済的要因にどのような影響があるのかについての量的な調査研究が蓄積されている。若年出産が収入、就業状況、教育達成に与える影響について各先行研究で結果は分かれるものの、若年出産が教育達成（特に高校卒業）や教育期間、賃金や就業経験に関連がある、あるいは否定的な影響を与えるという結果がいくつかの先行研究で指摘されている（表2）。

表2　10代親の社会経済的アウトカムに着目した先行研究

文献	対象国	調査対象の年齢	アウトカム	データセット	主要な調査結果
Berrington et al (2005)	イギリス	19歳以下の女性	収入、住宅、パートナーシップ・結婚、健康等	ALSPAC, BCS70, GHS	10代の母親は身体的・精神的に健康状況が悪い。10代の母親の素因と事後的な結果が組み合わさったことで大部分は引き起こされたと考えられる。
Berthoud et al (2001)	イギリス	15歳～19歳の女性	教育、パートナーシップ/結婚、職業、収入等	ECHP, NCDS, BHPS	ヨーロッパ諸国の比較により、10代の母親はすべての国で不利な状況にあるがその深刻さは各国で異なる。
Boden et al (2008)	ニュージーランド	21歳以下の女性	精神的健康、教育、就職等	CHDS	若年出産と事後の精神疾患との間には関連がみられない。若年出産とその後の教育達成や経済状況との関連は見られる。
Bradbury(2006)	オーストラリア	20歳以下の女性	教育、就業状況、パートナーシップ/婚姻	ALSWH	教育、就業状況、収入、所在地に対して10代の出産が与える影響はない。若年の母親は、20代後半で結婚する確率を減らす。20代前半で子どもをもつとひとり親の確率が高まる。
Chevalier and Viitanen(2003)	イギリス	18歳以下の女性	教育、就業状況	NCDS	10代親は16歳以降の就学の確率を12~24%減少させる。10代親の就業経験は3年少なく、賃金は5～22%低い。
DH and TPS (DfES)(2004)	イギリス	20歳以下の女性	教育、就職、収入、パートナーの就業状況、住居の所有、精	BCS70, BHPS, LFS	10代出産の長期的な否定的結果が見られるが、これは以前みられたほど広範囲には見られ

			神的健康、出生児体重		ない。母親のパートナーは職業的に地位が低く、10代の母親は高い産後うつの傾向がある。
Fletcher and Wolfe(2008)	アメリカ	19歳以下の女性	教育、体重	NLSAH(Add)	10代の出産は賃金や収入を大きく減らし高校卒業の確率をやや減少させる。就学や福祉受給期間には影響を与えない。
Francesconi (2008)	イギリス	子ども(20歳まで)の母親	収入、喫煙及び心理的悩み	BHPS	23歳以下の母親の子どもは、それより年上の母親の子どもと比べて達成が低い。若年出産を減らすことは子どもの貧困を根絶しないが、不利な子どものライフチャンスを増やす一つの戦略ではある。
Gustafsson and Worku(2007)	南アフリカ	18歳～24歳の女性	教育、パートナーシップ/婚姻、職業	SAGHS	10代の出産は高校卒業に負の相関があるが、多くのほかのアウトカムには負の効果は見られない。
Hobcraft and Kiernan(1999)	イギリス	23歳以下の女性	母親の健康（感情的、身体的）、利益、パートナーシップ/婚姻状況	NCDS	子ども期の背景因子をコントロールしても、大人のアウトカムと第一子出産年齢と関連がある。
Holmlund(2005)	スウェーデン	20歳以下の女性	教育	Swedish vital statistics	就学期間という点で10代親は不利な条件である。
Hotz et al(2005)	アメリカ	21歳以下の女性	教育、パートナーシップ/婚姻状況、収入	NLSY	不利なアウトカムは10代親と関連していない。アウトカムは社会経済的状況の結果である。出産を遅らせることは教育達成・収入を高めないし、家族構造に影響しない。
Kaplan et al(2004)	イギリス	20歳以下の女性	収入、教育、パートナーシップ/婚姻	BCS70	18歳～20歳で妊娠した女性と18歳以下で妊娠した女性と比べたところ否定的な影響はそれほど強くなかった。10代親の否定的な影響は一時的である。
Klepinger et al(1999)	アメリカ	20歳以下の女性	労働市場への参加、収入	NLSY	10代の出産は正規教育の期間と就業経験を減少させる。25歳時の賃金に有意な影響が見られる。

出典：Arai (2009: 80-83)をもとに筆者が作成。

（2）若年出産が子どもに与える影響

また、若年の出産がその子どもにどういう影響を与えるかという問題意識からの研究がなされている。坂本(2007)は、Ermisch and Francesconi(2001)に倣い、出産時の母親の年齢が21歳以下である場合を「若齢出産」とみなしている。「消費生活に関するパネル調査」の回顧調査項目を活用し、親の若齢出産の経験や一人親家庭で育った経験などが、その後の子どもの成長（学歴、就業状況、身体的・精神的苦痛、子ども自身の若齢出産）にどのような影響を与えるかについて検証している（若齢出産サンプル 132 人、若齢出産ではないサンプル 2,704 人）。その結果、若齢出産は子どもの学歴達成、就業経験期間に対して負の影響が、そして子ども自身の若齢出産に対して正の影響があることを確認している。また、若い世代ほど若齢出産をしており、両親の学歴をみると、若齢出産世帯の方が中学卒割合が高く、大学・大学院卒割合が低く、就学年数と若齢出産に負の関係がある。さらに父親の職種では、若齢出産世帯の方が「管理職」「事務職」割合が低く、技能工、警察官、運転士、配達員、職人などの「技能・作業職」と「販売サービス職」の割合が高い結果となっている。

窪田(2009)は、大阪大学 COE プログラム「アンケートと実験による行動マクロ動学」の一環で 2008 年度に実施された本調査と 2006 年度に実施された親子調査を用い（本調査サンプル 7,150 人、親子調査サンプル 1,769 人）、母親の若年出産が子どもの就学に与える影響を明らかにしている。分析の結果、母親の若年出産が子どもの就学に与える影響は小さく、親の経済状況が若年出産を通じて大きく影響していることを確認している。

（3）若年出産の調整様式の国際比較

大川(2009)は、アメリカ・イギリス・日本における 10 代の出産の調整様式について検討し、日本では 10 代の出産をもたらす社会的背景について明らかになっている部分は少なく、社会問題としての視点は乏しいこと。その理由として、①10 代で出産する者の婚姻率が高く、家族としての形を成すために問題が表面化しない、②結婚後もパートナーや原家族の支援が受けやすい環境にあること、③10 代で出産することの子どもへのリスクが各国と比較して少ない点を上げている。こうした状況から、日本では 10 代の母親に対して公的な積極的支援が行われず、家族のインフォーマルサポートに頼らざるをえない状況であると結論づけている。

（4）本稿の視点

以上のように日本では若年出産に着目した量的研究がここ近年いくつかなされているが、パネル調査を用いた実態把握はまだなされていない。したがって本稿では、21 世紀出生児縦断調査（第 1～6 回）を用いて、日本における若年出産の社会経済的状況や子育ての実態を把握することにしたい。

2．21 世紀出生児縦断調査のデータ特性

上記で見てきたように、「若年出産」といっても、10 代に絞ったもの、20 代前半まで加えたものなど、各先行研究によってその区分は異なっている。先行研究の比較検討をふまえ、日本では若年出産よりも高齢出産が政策課題とされてきた背景もかんがみ、本稿では、「出生児調査」（第 1～6 回）を用い、「A.狭義の若年出産（10 代での出産）」「B.広義の若年出産（10 代～22 歳までの出産）」「C.高齢出産（35 歳以上の出産）」の 3 グループに類型化して考察を行うこととする。

表 3 は、各グループのサンプル数、第 1 回調査からの脱落数、第 1 回調査からの脱落率をまとめたものである。まず「A.狭義の若年出産（10 代での出産）」は、第 1 回調査時に 374 人で全サンプルに占める割合が 0.8%であった。調査を重ねるごとに、脱落率が最も高く、第 6 回時点では第 1 回調査からの脱落率が 52.1%であり、全サンプルに占める割合も 0.46%と約半分となっている。年齢幅を広げて、「B.広義の若年出産（10 代～22 歳までの出産）」をみると、第 1 回調査時のサンプルは 2,268 人となる（全サンプルに占める割合が 4.82%）。第 6 回時点では脱落率が 40.3%で全サンプルに占める割合も 3.52%と減少している。一方、「C.高齢出産（35 歳以上の出産）」は第 1 回調査時に 7,374 人（全サンプルに占める割合 15.68%）と最も多く、脱落率は 13.3%とほかのグループに比べて低く、回を重ねるごとに全サンプルに占める割合も、第 1 回から第 6 回までは 0.91%と微増している（表 3）。

表 3　3 グループのサンプル数・割合、脱落数、脱落率

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
A．10代での出産（狭義の若年出産（人））	374	270	262	209	204	179
各回の全サンプルに占める割合（%）	0.80	0.61	0.61	0.50	0.51	0.46
第1回からの脱落数（人）	–	104	112	165	170	195
第1回からの脱落率（%）	–	27.8	29.9	44.1	45.5	52.1
B．22歳以下の出産（広義の若年出産（人））	2,268	1,851	1,740	1,583	1,456	1,355
各回の全サンプルに占める割合（%）	4.82	4.21	4.06	3.81	3.66	3.52
第1回からの脱落数（人）	–	417	528	685	812	913
第1回からの脱落率（%）	–	18.4	23.3	30.2	35.8	40.3
C．35歳以上の出産（高齢出産（人））	7,374	7,016	6,917	6,770	6,545	6,393
各回の全サンプルに占める割合（%）	15.68	15.97	16.15	16.29	16.44	16.59
第1回からの脱落数（人）	–	358	457	604	829	981
第1回からの脱落率（%）	–	4.9	6.2	8.2	11.2	13.3

3．記述統計による比較

（1）世帯状況・同居状況

祖父母との同居状況をみると、狭義の若年出産ではほぼ半数が、広義の若年出産では約 4 割が同居している（図 1-1）。一方で、父親との非同居の割合をみると、狭義の若年出産は

20.1%（第 1 回）～28.4%（第 6 回）の割合で推移している。広義の若年出産でみると回を重ねるごとにその割合が上昇し、第 6 回では 19.3%と 2 割近くが父親と同居していない（図 1-2）。さらに具体的に世帯状況をみてみると、母子世帯（母子のみ）の割合は広義の若年出産でみると 8.3%（第 6 回）であり、高齢出産の 3.7%と比べると 2 倍以上であることがわかる（図 1-4,5）。

図 1-1　祖父母との同居

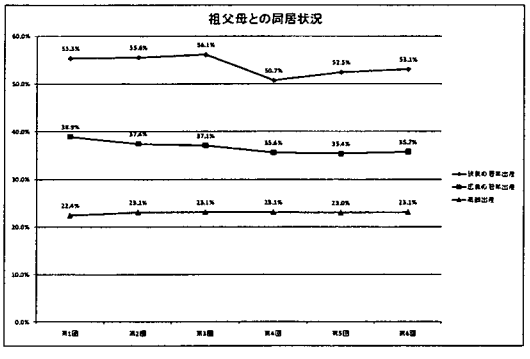


図 1-2 父親との非同居の割合

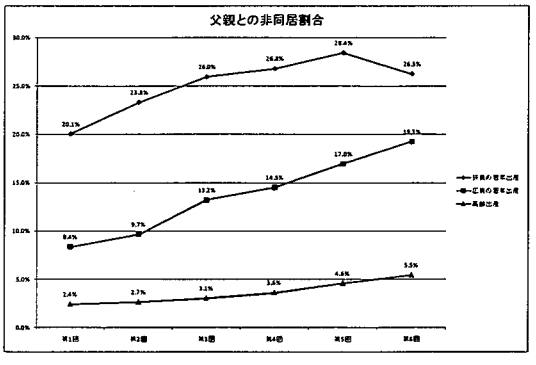


図 1-3　世帯状況（狭義の若年出産）

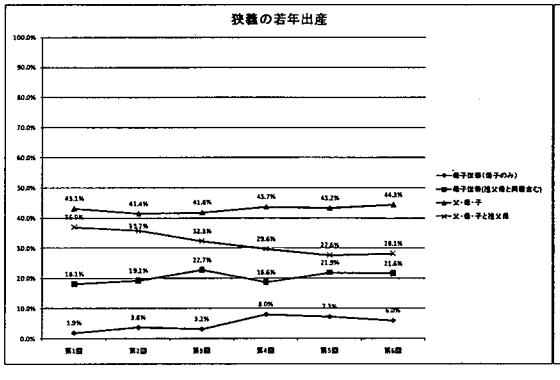


図 1-4　世帯状況（広義の若年出産）

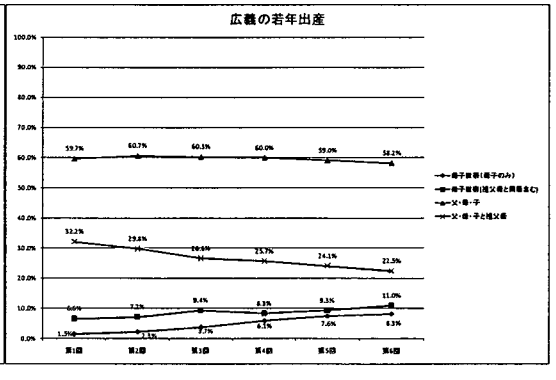
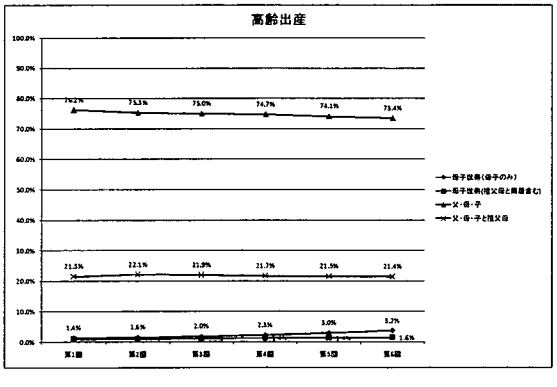


図 1-5　世帯状況（高齢出産）



（2）学歴

母親の最終学歴は、狭義の若年出産で中学校が 60.4%、広義の若年出産ではそれが 24.2%となっている。最終学歴を聞いているため、高校中退がどのくらいかはわからないが、この中には高校中退者もかなり含まれていると推察される。

父親の最終学歴は、狭義の若年出産で中学校が 31.1%、広義の若年出産ではそれが 21.7%である。大学卒の割合をみると、高齢出産と若年出産では母親・父親いずれも大きな差があることがわかる（表 4-1,2）。

表 4-1　母親の最終学歴

	中学校	専修・専門学校（中学校卒業後）	高校	専修・専門学校（高校卒業後）	短大・高専	大学	大学院	その他	不詳
狭義の若年出産	60.4%	.7%	36.7%	.4%	.4%	.0%	.0%	.4%	1.1%
広義の若年出産	24.2%	2.0%	57.0%	8.9%	5.3%	1.4%	.0%	.2%	1.0%
高齢出産	2.4%	1.3%	36.9%	17.7%	23.7%	16.4%	.9%	.1%	.7%

表 4-2　父親の最終学歴

	中学校	専修・専門学校（中学校卒業後）	高校	専修・専門学校（高校卒業後）	短大・高専	大学	大学院	その他	不詳
狭義の若年出産	31.1%	.7%	43.3%	6.7%	.4%	3.0%	.0%	.0%	14.8%
広義の若年出産	21.7%	1.8%	51.5%	10.3%	1.6%	7.3%	.1%	.1%	5.6%
高齢出産	3.9%	1.4%	34.7%	9.7%	3.0%	40.4%	4.9%	.1%	1.8%

（3）就業状況

母親の就業状況をみると、若年出産（狭義・広義）では常勤雇用が第 3 回まで 1 割程度であるが、第 6 回では 2 割弱に上昇している（図 2-1）。ただ、パート・アルバイトは常勤雇用以上に上昇しており。第 6 回では広義の若年出産で 4 割をしめている（図 2-2）。

就業中ではない層に絞ってみてみると、仕事を探している割合はいずれの層でも第 2 回以降減少し、第 6 回では約 1 割となっている（図 2-3）。一方で、仕事を探していない割合を見ると、広義の若年出産で 32.9%、狭義の若年出産で 36.8%で、その割合は回を追うごとに減少していることがわかる（図 2-4）。

父親の就業状況は、狭義の若年出産では常勤が 83.3%（第 1 回）から 95.5%(第 6 回)と上昇しており、高齢出産の割合が一定であるのと対照的である（図 2-5）。逆に、パート・アルバイトの割合も、狭義の若年出産では 12.8%(第 1 回)から 2.7%（第 6 回）と急激に減少している（図 2-6）。仕事を探している割合（図 2-7）も重ねてみると、狭義の若年出産の父親の就業状況は、特に出産後の数年は大きく変化していることがわかる。

図 2-1　母親：常勤

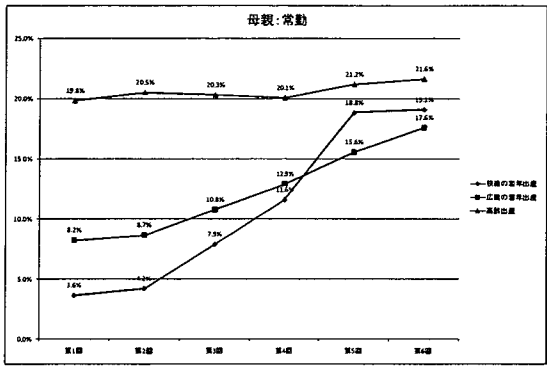


図 2-2　母親：パート・アルバイト

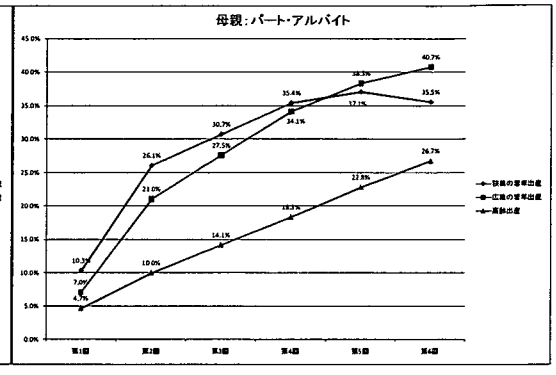


図 2-3　母親：仕事を探している

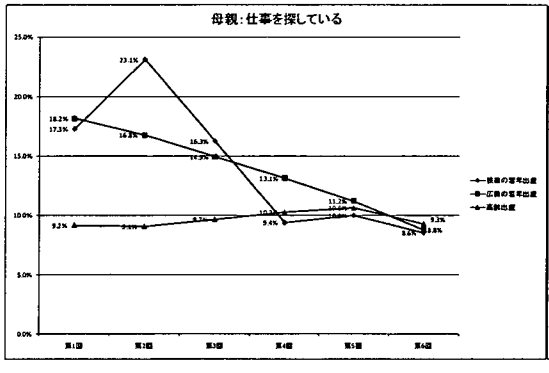


図 2-4　母親：仕事を探していない

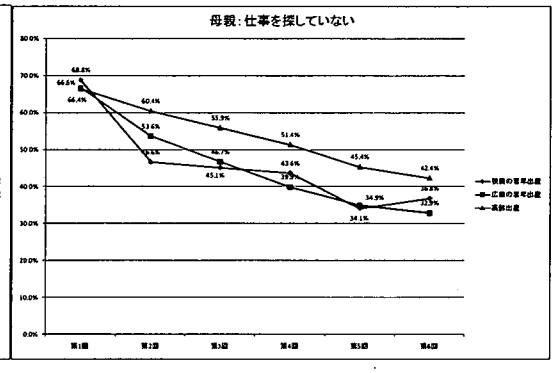


図 2-5　父親：常勤

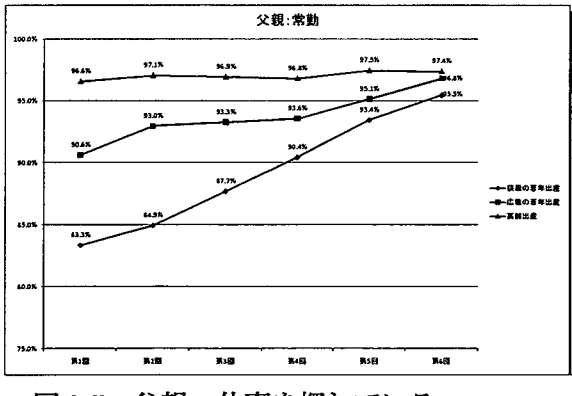


図 2-6　父親：パート・アルバイト

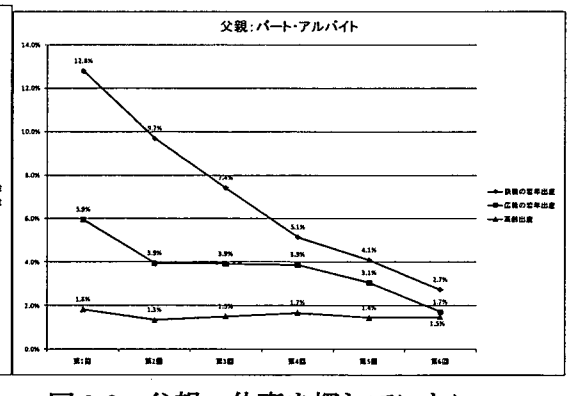


図 2-7　父親：仕事を探している

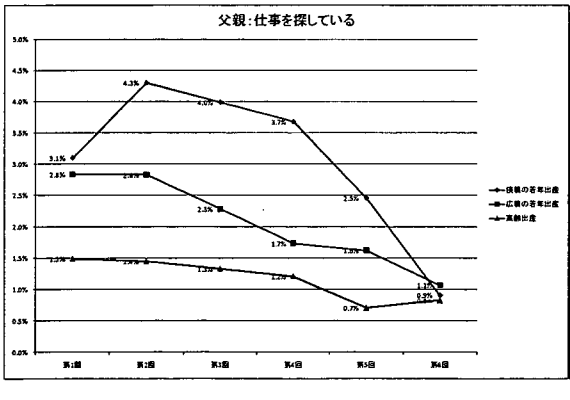
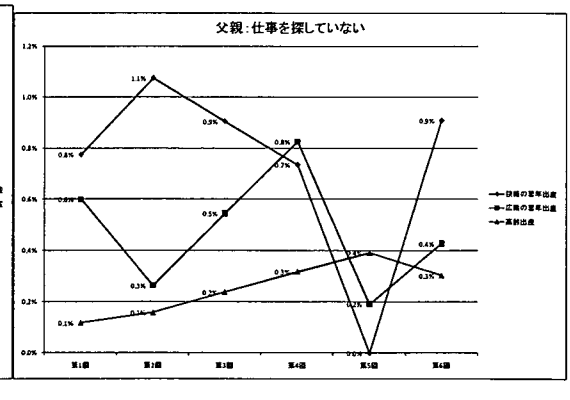


図 2-8　父親：仕事を探していない



（4）世帯収入と貧困率

以上の就業状況の変化は、世帯収入の変化にもあらわれている。狭義の若年出産の世帯収入は第 5 回で 277.7 万円であり、広義の若年出産では 338.3 万円、高齢出産では 675.1 万円となっており、狭義の若年出産の世帯収入は高齢出産の世帯収入の 4 割と大きな差がひらいている。母親収入、父親収入の内訳でみると、若年出産では高齢出産と比べて収入の変化が大きく、経済的状況に変化が大きいことが読み取れる（表 5)。貧困率をみても、狭義の若年出産の貧困率が顕著に高く、第 1 回は 69.79%と約 7 割を占めており、第 6 回でも 49.02%と半数を占めている（図 3)。

表 5　世帯収入

狭義の若年出産　（上段:平均値(万円)、下段:標準偏差)

	第1回	第2回	第4回	第5回
母親収入	19.6 (48.5)	10.1 (33.2)	40.4 (65.9)	57.2 (101.5)
父親収入	146.6 (217.9)	162.2 (153.5)	187.1 (177.2)	206.1 (181.7)
その他の収入	12.9 (62.3)	18.0 (41.4)	18.8 (49.3)	14.4 (28)
世帯収入	179.1 (233.1)	190.2 (158.5)	246.2 (175.7)	277.7 (216.1)
その他の収入が世帯収入に占める割合	9.4 (25)	20.1 (34.6)	13.5 (27.1)	8.7 (18.5)

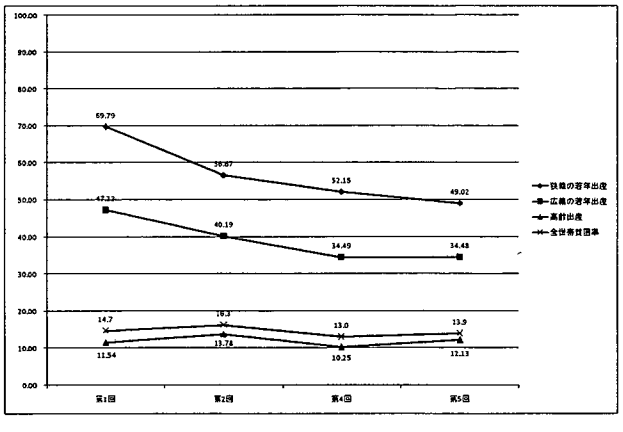
広義の若年出産　（上段:平均値(万円)、下段:標準偏差)

	第1回	第2回	第4回	第5回
母親収入	47.6 (75.5)	14.8 (44.9)	42.9 (103.9)	53.1 (86.6)
父親収入	210.8 (298.4)	229.6 (172.1)	260.1 (308.5)	267.7 (242.7)
その他の収入	10 (42.1)	18.2 (35)	13.9 (29.9)	17.5 (136.1)
世帯収入	268.4 (314.6)	262.6 (182)	317 (325.5)	338.3 (284.7)
その他の収入が世帯収入に占める割合	5.5 (17.8)	11.2 (22.5)	7.7 (18.2)	7.2 (16.7)

高齢出産　（上段:平均値(万円)、下段:標準偏差)

	第1回	第2回	第4回	第5回
母親収入	113.1 (207.8)	59.1 (143.5)	97.2 (210.7)	106 (263.8)
父親収入	528.6 (397.8)	517.2 (386.8)	543.1 (409.9)	551.6 (494)
その他の収入	9.7 (64.8)	20.9 (53.8)	15.2 (74.5)	17.5 (134.7)
世帯収入	651.4 (468.8)	597.2 (431.6)	655.4 (493.1)	675.1 (658.8)
その他の収入が世帯収入に占める割合	2.1 (9.7)	5.7 (15.3)	3.9 (13.2)	4.0 (13.4)

図 3　貧困率



（5）子育て費用や習い事

こうした社会経済状況の違いは、子育て費用や習い事にどうあらわれているだろうか。狭義の若年出産と高齢出産の収入が大きく異なることを上記で見てきたが、その大きさに比べて、子育て費用や保育料の差は小さいことがわかる。すなわち、毎月の子育て費用として第6回では若年出産で4万円、高齢出産で5万円であり、保育料（第6回）でみても、狭義の若年出産（2.2万円）と高齢出産（2.6万円）とでは4千円の差であり、子どもにかかる費用自体は、第6回になると収入ほどは大きな違いが見られない（表6）。

ただ、習い事の状況（第6回）をみると、若年出産と高齢出産では幼児教室、音楽、体操、水泳、英語それぞれで2～3倍のひらきがあり（表7）、今後は子どもにかける費用の差が大きくなっていくことが推測される。

表6　子育て費用

①子育て費用(単位：万円)

	狭義の若年出産	広義の若年出産	高齢出産
第1回	6.0	5.6	3.9
第2回	3.4	3.0	2.9
第3回	2.2	2.3	2.5
第4回	2.5	3.0	3.6
第5回	4.5	4.4	6.2
第6回	3.9	4.1	5.0

②保育料(単位：万円)

	狭義の若年出産	広義の若年出産	高齢出産
第1回	3.1	2.9	3.7
第2回	1.8	1.8	2.7
第3回	1.8	2.0	3.0
第4回	1.9	1.9	2.8
第6回	2.2	2.1	2.6

③習い事費用

	狭義の若年出産	広義の若年出産	高齢出産
第6回	1.1	0.9	1.4

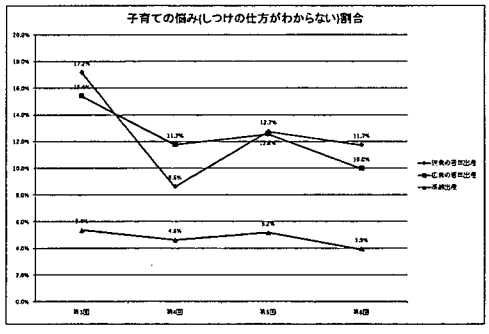
表7　習い事の状況（第6回）

幼児教室	狭義の若年出産	3.4%
	広義の若年出産	1.8%
	高齢出産	6.3%
音楽(ピアノなど)	狭義の若年出産	5.0%
	広義の若年出産	7.2%
	高齢出産	21.2%
体操	狭義の若年出産	3.4%
	広義の若年出産	3.9%
	高齢出産	12.0%
水泳	狭義の若年出産	8.4%
	広義の若年出産	11.8%
	高齢出産	20.2%
英語	狭義の若年出産	6.1%
	広義の若年出産	7.2%
	高齢出産	12.7%

（6）育児不安・ストレス

最後に、出生児調査では育児不安・ストレスについて丁寧に設問をもうけて聞いているが、それを若年出産・高齢出産のクロスでみてみると、「子育ての悩み（しつけの仕方がわからない）」という項目でもっとも大きな差がみられた。すなわち、第3回でみると、しつけの仕方がわからない割合は、高齢出産が5.4%なのに対して、若年出産では17.2%（狭義）、15.4%（広義）と約3倍となる。第6回までにその割合は減少するものの、高齢出産とは2倍以上のひらきがある（図4）。

図4　子育ての悩み（しつけの仕方がわからない）



4．考察

EU 諸国の比較研究によれば、各国にバリエーションがあるものの、10 代で出産した女性の方が 20 代で出産した女性よりも暮らし向きが相対的に悪いことが明らかになっている。また、ヨーロッパ諸国では、若年出産が社会経済的要因にどのような影響があるのかについての量的な調査研究が蓄積されており、若年出産が収入、就業状況、教育達成に与える影響について各先行研究で結果は分かれるものの、若年出産が教育達成（特に高校卒業）や教育期間、賃金や就業経験に関連がある、あるいは否定的な影響を与えるという結果がいくつかの先行研究で指摘されている。

日本では若年出産に着目した研究が近年いくつかなされているが、パネルデータを用いたその実態把握はなされているとはいいがたい。本稿では、本稿では若年出産に焦点をあて、先行研究のレビューをふまえ、現代日本における若年出産の社会経済的な状況と子育ての実態について、出生児調査（第 1～6 回）を用いて探索的な分析を行った。ここでは以下 5 点にまとめて、その考察と含意を整理する。

第一に、狭義の若年出産（10 代での出産）グループは他のグループに比べて非常に脱落が多く、全サンプルに占める割合が減少している。逆に、高齢出産が全サンプルに占める割合が上昇している。パネルデータのサンプルを追加する際には、出産時期の視点も入れた検討が必要だと考える。

第二に、狭義の若年出産の最終学歴をみると中学校が 6 割、父親の最終学歴も狭義の若年出産では中学校が 3 割である。出生児調査では高校中退を問うていないため実態は把握できないが、先行研究をふまえると、この中には高校中退がかなり含まれていると推測される。若年出産が就学時期や継続に与える影響を分析するうえでも、親の高校中退に関する実態把握は重要であり、今後の出生児調査において、この点に関する設問を含めることも検討が必要だと考える。

第三に、就業状況をみると、若年出産は高齢出産の層に比べて就業状況の変化が大きく、それに伴い世帯収入の変化も大きい。狭義の若年出産の貧困率が 69.79%（第 1 回調査）と非常に高く、経済的な状況が大変不安定である。その背景には、狭義の若年出産では父親

との同居率や常勤雇用の比率がもっとも低いという要因がある。祖父母との同居率が若年出産では最も高いが、祖父母との同居によって暮らしを成り立たせられる層以外に、孤立して子育てしている若年出産の層のよりいっそうの実態把握が必要であると考える。

第四に、子育て費用や保育料は若年出産が顕著に低いわけではなかった。ただし、習い事の実態をみると若年出産と高齢出産では習い事をさせている割合に 2～3 倍の違いがあり、今後子どもが小学校に上がるにつれて、塾など習い事がより多くなれば、子ども間の機会格差はよりいっそう拡大していくのではないかと考えられる。若年出産の貧困リスクや社会経済的な不安定のリスクをふまえた子育て支援のあり方を議論する余地があると思われる。

最後に、育児不安や育児ストレスについて、狭義の若年出産グループでは、子育ての仕方がよくわからないといった点への不安が顕著に高かった。これまでの育児不安・ストレスの議論ではあまり浮かびあがってこなかった論点であり、子育て支援でも、特に若年出産の層に焦点をあてたサポートのあり方もより一層検討される必要があると考える。

5．おわりに

今年度は若年出産の実態把握を、狭義の若年出産（10 代）、広義の若年出産（22 歳以下）、高齢出産（35 歳以上）の 3 グループで探索的な分析を行ったが、次年度の課題として、若年出産を 10 代、20 代前半、20 代後半、30 代前半等、コーホートごとの分析、父親の年齢についてもあわせて検討していきたいと考えている。

文献

Angrist, J. and Lavy, V. (1996) "The Effect of Teen Childbearing and Single Parenthood on Childhood Disabilities and Progress in School," *NBER Working Papers* No. 5807 October, National Bureau of Economic Research.

Arai, L. (2009) *Teenage Pregnancy: The Making and Unmaking of a Problem*, Bristol: Polity Press.

Berrington, Ann, Diamond, Ian, Ingham, Roger, Stevenson, Jim, Borgoni, Riccardo, Cobos Hernández, M. Isabel and Smith, Peter W.F. (2005) *Consequences of teenage parenthood: pathways which minimise the long term negative impacts of teenage childbearing*. UK, Department of Health. http://www.dcsf.gov.uk/research/data/uploadfiles/RW52.pdf（アクセス　2009 年 12 月 1 日）

Berthoud, R. and Robson, K. (2001) *The Outcome of Teenage Motherhood in Europe*, Innocenti Working Paper No.86, Florence: UNICEF.

Boden J M, Fegusson DM, Horwood LJ. "Early motherhood and subsequent life outcomes", *The Journal of Child Psychology and Psychiatry*; 49(2): 151-160.

http://www.uoc.otago.ac.nz/research/chds/publications/2008/303.pdf（アクセス　2009 年 12 月 1 日）

Bradbury, B.(2006) *The Impact of Young Motherhood on Education, Employment and Marriage*, Paper presented at the 35th Australian Conference of Economists, SPRC Discussion Paper No. 148, September 2006.

http://www.business.curtin.edu.au/files/bradbury.pdf（アクセス　2009 年 12 月 1 日）

Chevalier, A., Viitanen, T.K.(2003) "The long-run labour market consequences of teenage motherhood in Britain", *Journal of Population Economics*, 16(2), pp. 323-343.

DH(Department of Health) and TPS(Teenage Pregnancy Strategy) (2004) Long-term Consequences of Teenage Births for Parents and their Children, Teenage Pregnancy Research Programme research briefing, London, UK: DH and TPS

http://www.dcsf.gov.uk/everychildmatters/resources-and-practice/RS00034/（アクセス 2009 年 12 月 1 日）

Ermisch, J. and Francesconi, M. (2001) "Family structure and children's achievements," *Journal of Population Economics*, 14: 249–270.

Fletcher, J.M. and Wolfe, B.L.(2008) *Education and Labor Market Consequences of Teenage Childbearing: Evidence Using the Timing of Pregnancy Outcomes and Community Fixed Effects* (March 2008). NBER Working Paper No. W13847.

Francesconi, M.(2008) "Adult Outcomes for Children of Teenage Mothers", *Scandinavian Journal of Economics*, 110(1), pp. 93-117.

Gustafsson, S. and Worku, S. (2007) *Teenage Motherhood and Long-run Outcomes in South Africa*, TI 2007-024/3, Tinbergen Institute Discussion Paper, University of Amsterdam.

http://www.tinbergen.nl/discussionpapers/07024.pdf（アクセス　2009 年 12 月 1 日）

Hobcraft, J. and Kiernan, K. (1999) Childhood poverty, Early Motherhood and Adult Social Exclusion. CASEpaper, 28. Centre for Analysis of Social Exclusion, London School of Economics and Political Science, London, UK.

http://libeprints.lse.ac.uk/6484/1/Childhood_Poverty,_Early_Motherhood_and_Adult_Social_Exclusion.pdf（アクセス　2009 年 12 月 1 日）

Holmlund, J.(2005) "Estimating Long-Term Consequences of Teenage Childbearing: An Examination of the Siblings Approach", *Journal of Human Resources*, 40(3), pp. 716-743.

Hotz, V. J., McElroy, S.W., and Sanders, S.G. (2005) "Teenage Childbearing and Its Life Cycle Consequences: Exploiting a Natural Experiment", *Journal of Human Resources*, 40(3), pp. 683-715.

Kaplan, G., Goodman, A., and Walker, I. (2004) *Understanding the Effects of Early Motherhood in Britain: the Effects on Mothers*, Warwick Economic Research Papers, No 76, Warwick, UK: University of Warwick.

http://wrap.warwick.ac.uk/1482/1/WRAP_Kaplan_twerp706.pdf(アクセス 2009 年 12 月 1 日)

Klepinger, D., Lundberg, S., and Plotnick, R. (1999) "How Does Adolescent Fertility Affect the Human Capital and Wages of Young Women?", Journal of Human Resources, 34(3), pp.421-48.

細金和子(2009)「10 代でひとり親家庭の母となる人たち」子どもの貧困白書編集委員会編『子どもの貧困白書』明石書店、250-251 頁。

伊藤悠子(2009)「10 代の出産と子育て・子育ち：貧困からのダメージを乗り越える力」子どもの貧困白書編集委員会編『子どもの貧困白書』明石書店、247-249 頁。

窪田康平(2009)「母親の若年出産が子供の就学に与える影響」財団法人関西社会経済研究所。http://www.kiser.or.jp/ja/temp/pdf/779_Pdf01_15.pdf（アクセス　2009 年 12 月 7 日）

町田市子どもマスタープラン若年出産家族支援作業部会（2007）『若年出産家族の現状』

大川聡子(2009)「10 代の出産をめぐる家族の調整」『立命館産業社会論集』45(1)、207-228 頁。

坂本和靖「親の行動・家庭環境がその後の子どもの成長に与える影響」IPSS Discussion Paper(No. 2007-J01) 国立社会保障人口問題研究所。

東京都社会福祉協議会保育部会調査研究委員会(2002)『10代で出産した母親の子育てと子育て支援に関する調査報告書』

上田美香・森田明美(2009)「10代子育て家庭への妊娠期からの福祉的支援に関する研究：A市における10代親への継続的インタビュー調査」(日本社会福祉学会第57回全国大会自由報告、2009年10月11日、法政大学)

若林ちひろ・森田明美・井上仁・田谷幸子・前田信一・兼井京子(2009)「10代子育て家庭への妊娠期からの福祉的支援に関する研究：児童福祉施設入所施設出身者、施設職員への調査」(日本社会福祉学会第57回全国大会ポスター発表、2009年10月11日、法政大学)

１２　子ども観と育児方針２
――第１回～第６回「出生児縦断調査」の分析より――

元森 絵里子

１．本稿の目的と前年度、前々年度報告書の概要

1.1 子ども観の４分類とその規定要因

筆者は、前年度、前々年度報告書において、「21 世紀出生児縦断調査」（以下、出生児調査）の第３回問 14「平成 13 年１月／7 月生まれのお子さんはどのような子に育って欲しいと思いますか。次のうち、特に重視したいもの 5 つまでを選んでその番号に○をつけてください」という設問[1]の回答傾向を用いて、全ケースを４つの子ども観を持つグループに分け、それぞれの属性や育児方針や教育行動の違いを分析してきた（元森 2008、2009）。

グループ分けは、SPSS を用いたコレスポンデンス分析で析出された２軸を元に行った。第 1 軸は、他者との協調や調整的な行動を支持する傾向と、自発的で積極的な行動を支持する傾向（調整―積極軸）、第２軸は、知性を重視する傾向と感性を重視する傾向（知性―感性軸）からなると解釈でき、それによってできる 4 グループは、子ども観研究が明らかにした「近代的子ども観」に照らし合わせて、図１のようにも見なすことができる。

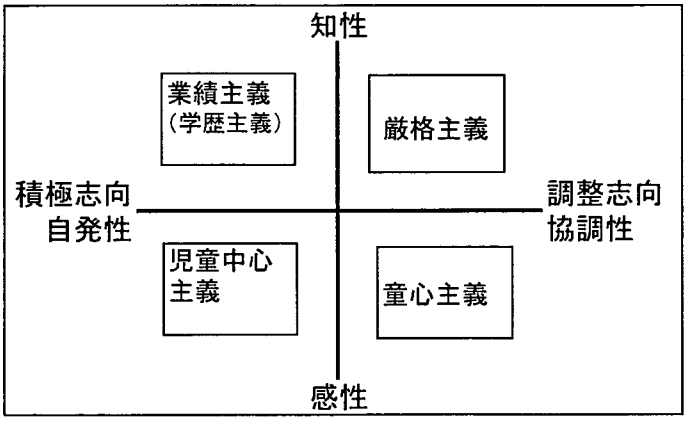


図１　「出生児縦断調査」における子ども観の４分類

すなわち、「調整・協調」かつ「知性」を重視する第１象限は、道徳・しつけに関する知を重視する厳格主義、「積極・自発」かつ「知性」を重視する第２象限は、子ども自身によ

[1] 選択肢は、「思いやりのある子ども」「じょうぶなからだの子ども」「命あるものを大切にする子ども」「正直な子ども」「自分の思うことをはっきり言える子ども」「物を大切にする子ども」「感性豊かな子ども」「礼儀正しい子ども」「人の話をよく聞く子ども」「よく考えて行動する子ども」「好奇心の旺盛な子ども」「自然が好きな子ども」「正義感の強い子ども」「その他」の 15 項目である。

る知識の獲得を強調する学歴主義（より一般的な言い方をすれば業績主義）、「積極・自発」かつ「感性」を重視する第 3 象限は、何事においても子どもの自発性と感性を重視する児童中心主義、「調整・強調」かつ「感性」を重視する第 4 象限は、周囲に調和した子どもらしさを重視する童心主義と言い換えられることになる。

元森（2008）では、その規定要因を家族の属性や子ども側の要因に探っているので、その結果をまとめた形で表 1 に再掲する。それによれば、「知性×調整」（厳格主義）は、保守的ないし階層的に劣位と見られる層、「知性×積極」（業績(学歴)主義）は、エリートで父母の年齢が高めの層、「感性×積極」（児童中心主義）は、それにくわえて都市部で母親が常勤職など時代の先端をいく層、「感性×調整」（童心主義）は、専業主婦家庭で若く小さい子どもの多い層に、それぞれ多く見られるということがわかる。

表 1　子ども観 4 分類の規定要因

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
子どもの性別	女児	男児		女児
子どもの成長*		特に成長が早い	成長が早い	
兄姉	兄姉あり		兄姉なし	
弟妹				弟妹あり
多胎児か否か				三つ子
祖父母との同居	祖父母と同居		祖父母と別居	
	（別居の場合、祖父母との行き来が頻繁であるほど調整志向）			
都市規模*	郡部		13大都市	
住居携帯	一戸建て		集合住宅	
母親の職業			母常勤	母主婦
父親の職種	父（母）職業威信低い	父（母）職業威信高い		
父母の収入		父母の収入高い		
父母の学歴	父母高卒以下	父母高等教育以上		父母高卒以下
父親の年齢		父40代以上		父30代
母親の年齢		母30代後半以上		母30代前半以下
回答者	母が回答	父が回答		母が回答

※*印は、ロジスティック回帰分析では有意ではなかった

この結果を元に、さらに大胆に現代の子ども観の 4 種類を描き出してしまえば、図 2 のようになるかもしれない。

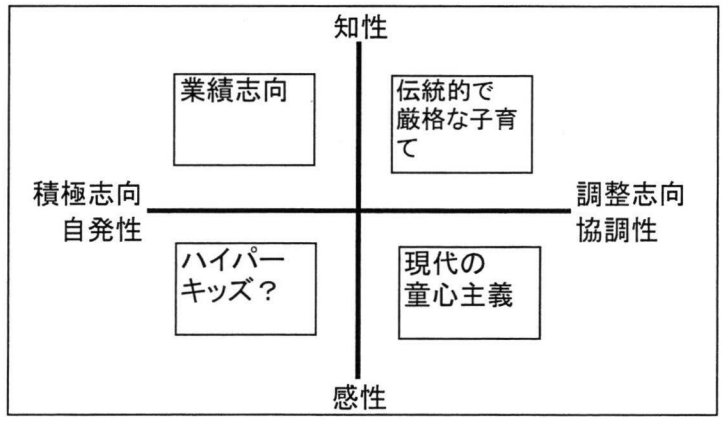


図 2　「出生児縦断調査」における子ども観の 4 分類

1.2 子ども観と育児方針・教育行動

この 4 分類を用いて、さらに、元森（2008）では、しつけの仕方としてのしかり方（第 4 回問 16「お子さんが悪いことをした場合どのように対応していますか」）について、元森（2009）では、主に意識・配慮していることといった育児方針（第 1 回問 9「子育てで意識して行っていること」、第 2 回問 4「食事で気をつけていること」、第 3 回問 6「おやつについて家庭で気をつけていること」、第 4 回問 13「健康に関することで意識して行っていること」、「第 5 回問 4 遊びについて意識していること」、第 6 回問 10「食事時に特に気をつけていること」）と、教育行動（第 6 回問 11「お子さんに、次のようなお手伝いをさせていますか」、第 3 回～第 6 回の「お子さんは現在、習い事をしていますか」）の傾向の違いを分析している。その概要をまとめたのが、表 2 である。

表 2 子ども観としかり方・育児方針・教育行動

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
お子さんが悪いことをしたときの対応（4-16）	有無を言わさず教え込む厳格なしつけの傾向	やや厳格なしつけ	対話的で考えさせるしつけの傾向	やや対話的なしつけ
子育てで意識して行っていること【情操教育】（1-9）	すべてに意識が高くない傾向	それなりに意識あり	すべてに意識が高い傾向	
食事で気をつけていること【時間や栄養など】（2-4）	古典的なしつけに熱心な傾向		健康や好みに気を配るが古典的なしつけは抑え目の傾向	しつけより健康志向
おやつについて家庭で気をつけていること（4-13）	気をつけていない傾向	手作りなどやや気をつけている	全体的に気をつけている（時間はルーズ）	
健康に関することで意識して行っていること（4-13）	親の関与や健康で元気な子ども志向が弱い傾向	元気に動く子どもを志向する傾向	親の自覚的な関与と健康で元気な子どもを志向する傾向	衛生面への関心が高い傾向
遊びについて意識していること（5-4）	すべてで意識が高くない傾向	体力重視の傾向	ほぼすべてに意識が高い傾向	健康・衛星・自然志向の傾向
食事時に特に気をつけていること【食事中のマナーのしつけ】（6-10）	食事の仕方など外面的なしつけに熱心な傾向		全体的に意識が高くない傾向	基本的な食事のしつけに熱心な傾向
お手伝いさせていること（6-11）	いわゆる家事の手伝い重視の傾向	全体的に熱心でない傾向	コミュニケーションや情緒に結びつくお手伝い重視の傾向	家事の手伝い重視＋コミュニケーション・情緒重視の傾向
習い事（第3回～第6回）	そろばん以外では熱心ではない傾向	知育に熱心	情操教育に熱心	古典的な習い事（習字・そろばん）には熱心ではない傾向

しつけでは、全体として分類ごとに大きな差異は見られないが、「知性」グループ、中でも「知性×調整」は有無を言わさず教え込む厳格なしかり方を採用やすく、「感性」グループ、中でも「感性×積極」は子どもに理由を考えさせ、自分で判断できるようにする対話的なしかり方を採用しやすいということが明らかになった。

育児方針においては、「知性×調整」グループは、全般的に他のグループより選択率が低